

ひたちなか 埋文だより 41



入館者 150,000人 埋蔵文化財調査センターの累計入館者が15万人を数えました。昨年に開館20周年を迎えたわけですから、年平均で7,500人ほどが訪れている計算になります。20年は、ひたちなか市が誕生してからの時間に、15万人は、ひたちなか市の人口にほぼ相当する数値です。人は十進法を基礎として、その節目にさまざまな慶事を作り出します。「入館者15万人」に遭遇することになったのは、市内の小学校1年生、磯崎航平さん。2014年7月21日のことでした。

特集 ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの20年

【出会い、別れ、そして夢考古学の旅路】 第13回 石岡市の遺跡の調査 (川崎純徳)

展示資料紹介 武田西塙遺跡の製塩土器 (佐々木義則)

深化する「壁画のワークショップ」 (堀江武史)

画像で報告する遠原貝塚 J7号住居跡

横穴墓を歩く⑫ 羽山横穴墓 (荒 淑人)

1ケース・ミュージアム 33 磯崎東古墳群

1ケース・ミュージアム 32 遠原貝塚の貝塚・遺跡めぐり 埼玉県の貝塚散歩

ひたちなか市の古墳④ 笠谷古墳群

歴史の小窓⑬ 焼け残った木材

ほか

おかげさまで

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターは、 開館20周年をむかえました！！

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターは、1993(平成5)年12月3日に開館してから、2013(平成25)年12月で開館20周年を迎えました。また、2014(平成26)年7月には、入館者数が15万人を超えました。ここでは、当センター開館から現在までに市内で実施された発掘調査を振り返りながら、当センターの歩みを見ていくことにします。

1993(平成5)年度

- ・12月3日開館📷
- ・殿塚1号墳や市毛下坪遺跡、三反田下高井遺跡など市内10遺跡で発掘調査
- ・武田西塙遺跡から古墳時代後期のワラジ状炭化物が出土



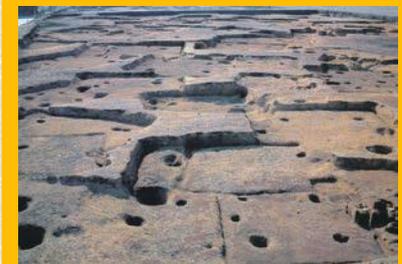
1994(平成6)年度

- ・ひたちなか市が誕生
- ・虎塚古墳石室レプリカ完成
- ・10月に入館者数1万人
- ・市内9遺跡で発掘調査
- ・三反田上河原遺跡から丸木舟📷が出土



1995(平成7)年度

- ・日本考古学協会ひたちなか大会が開催される
- ・磯崎東古墳群や金上相對遺跡など市内7遺跡で発掘調査
- ・三反田下高井遺跡では、住居跡82基📷を検出



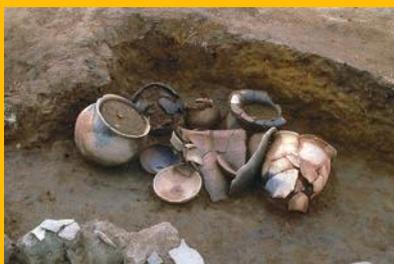
1996(平成8)年度

- ・乳飲み児を抱く埴輪が茨城県指定文化財に認定される
- ・堀口遺跡や岡田遺跡など市内9遺跡で発掘調査
- ・1986年度から続けられた武田遺跡群📷の発掘調査が終了



1997(平成9)年度

- ・津田若宮遺跡や勝倉古墳群、遠原遺跡、北谷遺跡など市内9遺跡で発掘調査
- ・船窪遺跡群📷の発掘調査を開始



1998(平成10)年度

- ・沢田遺跡や孫目古墳群、飯塚前古墳、ぼんぼり山古墳など市内14遺跡で発掘調査
- ・貉谷津遺跡の埋没谷から弥生時代の板材📷が出土



1999(平成11)年度

- ・7月に入館者数5万人
- ・虎塚3号墳や尼ヶ柵遺跡など市内11遺跡で発掘調査
- ・三反田蛭塚貝塚の発掘調査で縄文時代後期の土偶^①などが出土



2000(平成12)年度

- ・後野遺跡出土の石器が茨城県指定文化財に認定される
- ・向野遺跡群の発掘調査が再スタート
- ・半分山遺跡から線刻のある子持勾玉^②が出土



2001(平成13)年度

- ・1997年度から続けられた船窪遺跡群の発掘調査が終了
- ・津田若宮遺跡や君ヶ台遺跡、など市内9遺跡で発掘調査
- ・東中根清水遺跡で古代の版築遺構^③を確認



2002(平成14)年度

- ・開館10周年記念企画展「ひたちなか市の旧石器」を開催
- ・歴史民俗資料室が完成
- ・市内10遺跡で発掘調査
- ・東石川十文字遺跡から縄文時代早期の土器^④が出土



2003(平成15)年度

- ・虎塚古墳発掘30周年記念行事を開催
- ・標本陳列室でマリンバによるコンサートを実施
- ・君ヶ台貝塚で傾斜地に堆積した貝層^⑤を確認



2004(平成16)年度

- ・井上廣明コレクション791点が寄贈される
- ・2000年度から続けられた向野遺跡群の発掘調査が終了
- ・磯崎東古墳群や武田西塙遺跡^⑥など市内7遺跡で発掘調査



2005(平成17)年度

- ・道理山遺跡や大平C遺跡、三反田新堀遺跡など市内6遺跡で発掘調査
- ・鷹ノ巣遺跡^⑦の発掘調査で弥生時代のガラス小玉や奈良時代の文字瓦が出土



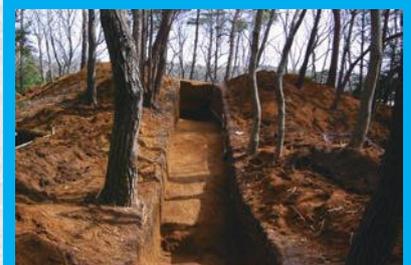
2006(平成18)年度

- ・11月に入館者数10万人
- ・考古学体験講座「ふるさと考古学」^⑧スタート
- ・市毛上坪遺跡や金上塙遺跡、岡田遺跡など市内14遺跡で発掘調査



2007(平成19)年度

- ・井上廣明コレクション墳輪展を開催
- ・岡田遺跡や富士ノ上Ⅱ遺跡など市内12遺跡で発掘調査
- ・虎塚2号墳^⑨と十五郎穴横穴墓群の測量・分布調査を開始



2008(平成20)年度

- ・『埋文だより』新装
- ・公開講座「ひたちなか市の考古学」がスタート
- ・三反田新堀遺跡[㊦]や平磯宮上遺跡、入道古墳群など市内11遺跡で発掘調査



2009(平成21)年度

- ・標本陳列室でオカリナによるコンサートを実施
- ・東中根遺跡群出土の弥生土器[㊦]が茨城県指定文化財に認定される
- ・市内12遺跡で発掘調査



2010(平成22)年度

- ・3月11日に東日本大震災で被災し、その後一時臨時休館
- ・三反田蜆塚遺跡や高野富士山遺跡、本郷東遺跡[㊦]など市内11遺跡で発掘調査



2011(平成23)年度

- ・4月1日より再開館
- ・市内10遺跡で発掘調査
- ・十五郎穴横穴墓群で未開口の館出35号墓の発掘調査を実施。人骨や大刀、刀子、須恵器[㊦]などが出土



2012(平成24)年度

- ・大房地遺跡や市毛上坪遺跡、三反田蜆塚遺跡など市内17遺跡で発掘調査
- ・鷹ノ巣遺跡の発掘調査で、古墳時代後期の一辺8mの大型住居跡[㊦]を確認



2013(平成25)年度

- ・開館20周年記念行事として馬渡埴輪製作遺跡から出土した埴輪の展示や講演会を実施
- ・雷遺跡や西中島遺跡など市内7遺跡で発掘調査



座文明と環境六「歴史と気候」

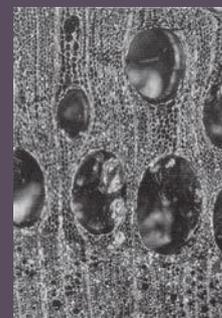
参考文献 鈴木三男二〇〇二『日本人と木の文化』、高橋敦ほか一九九四「樹種同定からみた住居構築材の用材選定」『PALYN O』、北川浩之一九九五「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」『講座文明と環境六「歴史と気候」』

居に使われたのだと考えられます。(佐々木義則)

すい性質を持つため、のこぎりが希少な古代では利用しやすい木材でした。クリは若木でもよく実をつけるので、集落近くの大きな木は優良材として、住居に使われたのだと考えられます。

ろ、その多くはクリでした。

平安時代前半は温暖期であったため、関東の住居

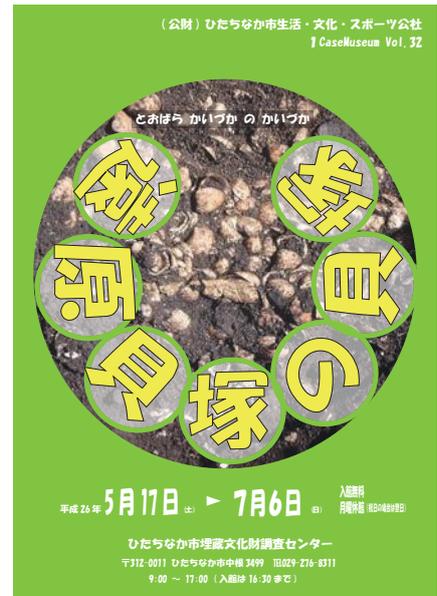


武田西橋遺跡310号住居跡出土炭化材断面(クリ)の顕微鏡写真

平安時代前半の武田西橋遺跡三一〇号住居跡は火事にあつていて、

焼け残った木材

歴史の小窓 その一三



遠原貝塚は、ひたちなか海浜鉄道湊線の金上駅から南西に徒歩約五分ほど、那珂川の支流・中丸川を望む台地上にあります。現在までに行われた六回の発掘調査で、縄文時代に関しては、七軒の住居跡と、一三ヶ所の地点貝塚を検出しました。出土した土器から、遠原貝塚が約六千年前の縄文時代前期に形成された遺跡であることがわかりました。当時は、「縄文海進」とよばれる現象により、海岸線は現在よりも内陸にあり、東京湾周辺など研究の進んでいる地域では、奥東京湾という呼び方で海岸線が推定されています。ひたちなか市域では確実な海岸線はわかっていませんが、現在は海から直線距離で7kmも離れている遠原貝塚も、海を臨む位置であったと考えられています。

遠原貝塚に形成されている「地点貝塚」とは、縄文時代中・後期に形成された「環状貝塚」「馬蹄形貝塚」のような、大規模な貝塚ではなく、

集落内の廃絶された住居跡や土抗に堆積する小規模な貝塚です。貝塚が小規模な理由としては、「貝塚が形成される期間が短い」「貝塚を形成する人数が少ない」などが考えられます。

一九九五年の第五次調査で検出したJ7号住居跡内に形成された地点貝塚で検出したヤマトシジミの貝殻は約30kgです。あるシジミのカップみそ汁は一食に約20gの貝殻が残りますので、一五〇〇〇食分に相当します。一年で消費したと考えると一日あたり約四〇杯。五人で食べた量を考えて一人当たり八杯分。一見、「これだけの量をどうやって食べたのか」と思う貝塚の貝殻ですが、こうして計算してみると、そんなにたくさん量になるわけではありません。

一三の地点貝塚は、いずれもヤマトシジミを主体とした貝塚でした。J7号住居跡の貝塚を詳細に分析したところ、97%がヤマトシジミということがわかりました。次に多いのが2.5%を占めるマガキ。残りの0.5%にハマグリ・アサリ・イガイ・イシマキガイ・ウネナシトマヤガイ・アワビ・シオフキなどが入っています。これらの貝は、すべてが意図的に持ち込まれたものではありません。例えばウネナシトマヤガイはカキ殻などに足糸を絡ませて付着します。検出されているものは3mm前後と小さく、わざわざとってきたとは考えられません。生態から考えても、マガキについてきたのではないのでしょうか。

(菊池順子)

遺跡めぐり 埼玉県 貝塚散歩

五月一六日、二〇一四年度の遺跡めぐりを実施しました。貝塚散歩シリーズの第三弾として、現在では「海なし県」の埼玉県に、縄文時代前期の貝塚を訪ねる企画です。埼玉県立歴史と民俗の博物館では富士見市南通遺跡の貝層剥ぎ取り断面を、富士見市水子貝塚資料館では地点貝塚のジオラマ、隣接する水子貝塚公園では復元された住居が並ぶ景観を視察しました。いずれも遠原貝塚をイメージするのに役立つ展示でした。



水子貝塚公園で復元住居を見学する

画報

像で 告する

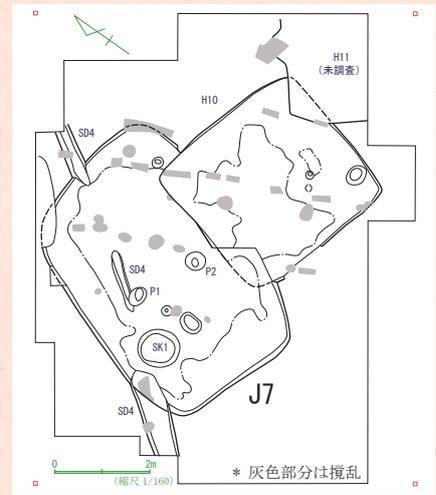


遠原貝塚 J7号住居跡

遠原貝塚の第5次調査は1994年度に実施されました。個人住宅建設に伴う緊急の調査で1995年の2月に発掘され、翌3月に報告書の刊行という期限があったため、出土遺物などを整理することがほとんどできないまま、簡単な事業報告が発行されています。「遠原貝塚の貝塚」の展示開催にあたり、J7号住居跡に形成された貝塚の概要を把握するため、遺物の整理を行いました。これもまた正式な報告書ではありませんが、展示図録の体裁で、調査成果の一部を公開しておきたいと思います。



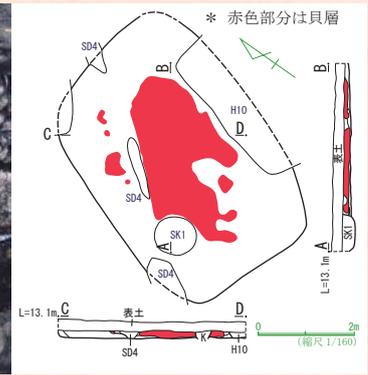
東方向から調査区全体を撮影



住居跡について J7号住居跡は長軸5.80m、短軸3.83mで、上から見るとやや歪んだ長方形をしています。床面の中央付近で対になる2基のピット(P1,P2)が支柱穴と見られます。炉址は検出されませんでした。時期は、縄文時代の前期です。攪乱のほか、溝(SD4)、土坑(SK1)、古墳時代前期の住居跡(H10)によって一部を破壊されていました。



貝層を残して住居跡を掘る



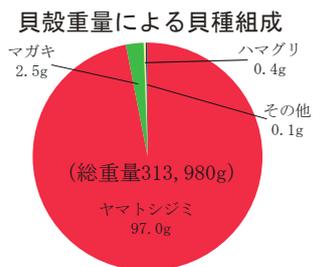
貝塚について 貝塚は住居跡のほぼ中央に形成されています。住居が廃絶され埋没が始まってから、その窪地に貝殻等が廃棄されました。貝層は、最も厚い部分で25cmほどの堆積です。ヤマトシジミを主体としますが、ハマグリが多い部分もあり、土の色や粉状に混じる貝殻などにより、貝層を細かく分けることもできます。土器の多くは、貝層の下から出土しました。



※『平成6年度市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会（この報告書ではJ7号が第1号、H10号が第2号という住居跡番号で報告されています。）

淡水	カワナシ
汽水	イシマキガイ
	ヤマトシジミ
汽水～内湾	マガキ
	ウネナシトマガイ
内湾	カワアイ
	ツメタガイ
	レイシガイ
	アカニシ
	ハクガイ
	シオフキ
	ムラサキガイ
	ワスレイソシジミ
	マテガイ
	アサリ
	オキシジミ
	ハマグリ
	オオノガイ
外海	クロアワビ
	サザエ
	イガイ
	コタマガイ
	チョウセンハマグリ

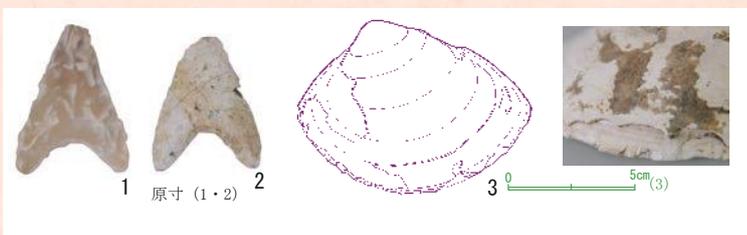
*陸産貝類を除く



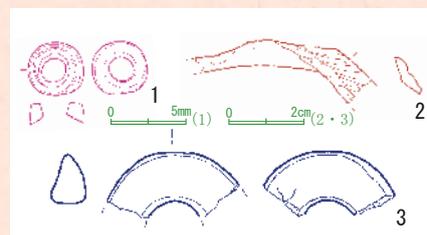
貝塚の貝類について 貝層は全て採取して、5mm・3mm・1mmという3通りの篩を使用して水洗しました。5mm篩上に残留した貝殻を分類したところ、全重量の97.0%をヤマトシジミが占めています。これに次ぐのがマガキの2.5%、ハマグリ0.4%で、残り0.1%に20種類の貝が見られました。合計23種の貝類を生息域別に一覧表で示しておきましょう。汽水域のヤマトシジミは、殻高20mm前後のものが最も多く、この大きさは現在のコンビニで販売されているインスタントみそ汁と変わりませんが、殻高34mmにも及ぶ大きなものも含まれることが異なります。外洋の貝類は少量ながら、肉量の大きなもの限定して持ち込まれていることに特徴が指摘できそうです。



獣骨・魚骨について 未萌出と、萌出して間もないと推定されるシカの歯が検出されていました。いずれも若齢の個体ということになります。両生類の椎骨があり、これはカエルでしょうか。魚骨では、コイ、ギバチ、スズキ、クロダイ、ニシン科の、それぞれ部分骨が同定されました。コイ、ギバチは川などの淡水域で、スズキ、クロダイ、ニシン科は、海水域でも内湾で捕獲されたことが考えられます。スズキは耳石が7点あり、そのうち左が3点、右が4点なので、少なくとも4尾分のもと考えられます。発掘時に記録された獣・魚骨は僅かでしたが、5mm篩上の全てと、3mm篩上の一部を選別することで、いくつかの知見が追加されました。

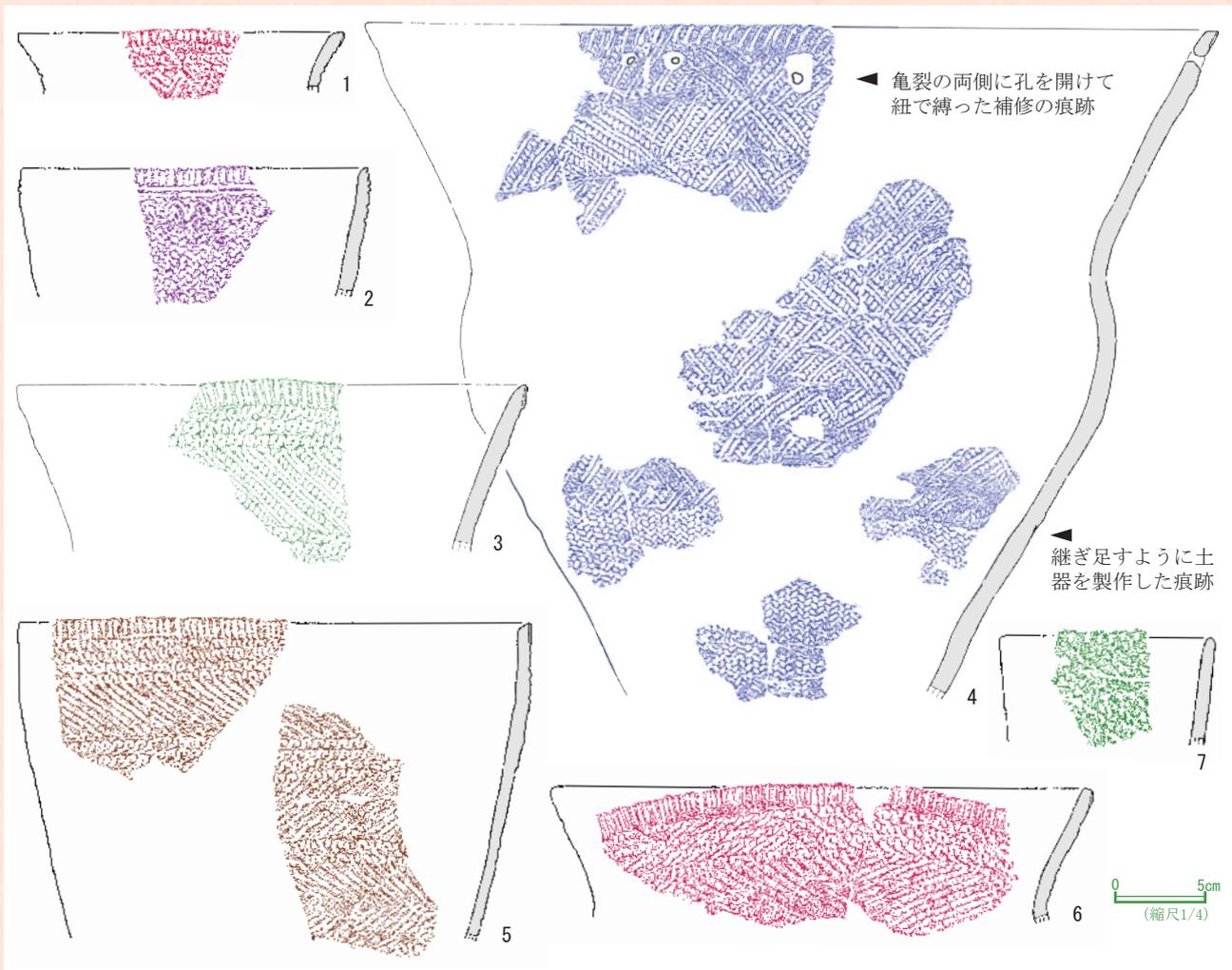


石器・貝器について 狩りに使用された石鏃(1・2)は5点が出土しました。無茎凹基と呼ばれる形態が典型です。石材にはメノウ(1)、オパール(2)、チャートなどが利用されています。貝層中からはメノウの剥片、破片も多数が検出されました。他に、ホルンフェルス^{うるこ}を石材とした礫器が、地表面から採取されています。魚の鱗剥ぎに使用された貝刃(3)は、破片も含めて39点が出土しました。ハマグリ、チョウセンハマグリの大きな貝殻の腹縁に、細かな剥離を加えて刃が付けられています。



貝製品・土製品について 貝製品の小玉(1)は巻貝の殻頂部を加工したもので、直径は3.3mm、厚さは1.5mmと、かなり小さなものです。貝輪(2)はサトウガイ類の右殻を素材としています。土製品(3)は珧状^{けつ}耳飾りの破片でしょう。土器とは異なり、植物繊維を含まない胎土で製作されています。

*貝については黒住耐二氏、獣魚骨については小宮 孟氏、石器石材については柴田 徹氏、貝製品については忍澤成視氏、土製品については相原淳一氏と鴉崎哲也氏にご教示をいただきました。感謝を申し上げます。

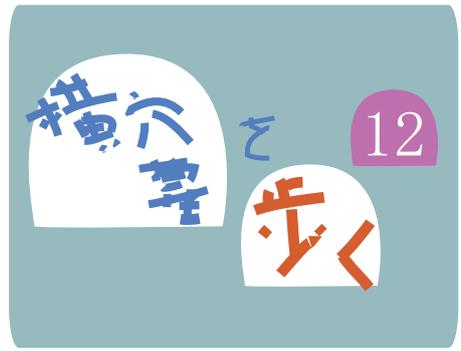


土器について 煮炊きに使われた深鉢形がほとんどで、大型(4)・中型(3・5・6)・小型(1・2・7)の3つの大きさが見られます。口縁部に縦の短い沈線が巡り、単節縄文(1・5・6)とループ文(1・3・5・6)を多用することが特徴です。縄文は他に異条縄文(3・4)、異節縄文(7)、組紐文(2・4)などもあります。鋸歯状文(1)やコンパス文(2)など、沈線による文様は多くありません。縄文時代前期「関山Ⅱ式」と同時期の土器群で、茨城県北部を中心とした地域的な特徴から「森東Ⅰ式」と呼んで区別していますが、異論もあるようです。土器の胎土には植物繊維が多量に含まれています。

(鈴木素行)



149,999 人目の入館者



福島県南相馬市
はやま
羽山横穴

荒 淑人

(南相馬市教育委員会)

国史跡羽山横穴は、JR常磐線原ノ町駅から南西方向に約4kmの、標高五〇mの丘陵斜面にある。羽山横穴の位置する太田川中流域には、上太田前田古墳や与太郎内古墳群、そして羽山横穴墓群を初めとする多くの横穴墓群が展開しており、市内でも有数の古墳密集地の一つとなっている。

羽山横穴は、昭和四八年、住宅団地造成中に発見され、同年一月から原町市教育委員会による緊急調査が実施された。調査後には東京文化財研究所の指導による保存施設が建設され、翌昭和四九年には国史跡に指定されることとなった。

羽山横穴は丘陵に展開する約二〇基を数える横穴墓のうちの一つで、正式には羽山横穴墓群一号墓となる。横穴墓の主軸は、ほぼ真東に玄門を向けて造営されている。横穴墓全体は玄室・玄門・羨道部・前庭部で構成されており、全長は八・三二mを計測する。玄室の平面形はほぼ正方形に近い

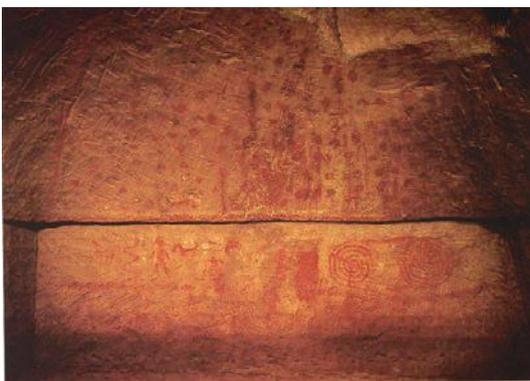
プランを持ち、奥壁幅二・七九m、右壁二・八五m、左壁一・九五mを計測する。直立する壁面の中心には軒を表現したとみられるわずかな段があり、その上の天井部はやや四辺が稜となるドーム型となっている。床面から天井部最上部までの高さは一・八mを計測し、大人が直立できるほどの高さがある。玄室床面の中央部分は長さ約一m、幅約〇・七五mの範囲が深さ約五cm程度掘りくぼめられており、奥壁に向かって左側には礫を敷き詰めた礫床がある。その上面から金銅装大刀一振、鉄製大刀一振、銅釧一点、鉄製轡一式、ガラス製小玉、鉄釘などが出土している。鉄釘があることから、おそらく棺はこの礫床の上に木棺を安置したものと考えられる。

玄室内に描かれた壁画は、奥壁、側壁、天井にある。描かれた壁画のうち側壁には床面近くに上下二段の珠文が、天井部は一面に広がる珠文と棟を表現した四本の直線がある。奥壁下半には人物馬、鹿、渦巻文、蛇行線、帯状、方形図柄で構成される壁画がある。壁画のうち最も目を引く渦巻文は奥壁右側にあり、右巻き五重の渦巻文二つが配置され、それぞれが五本の横線でつながれている。渦巻文の左には方形図柄があり、その左側には上位から白鹿一頭、腰に刀を帯びた人物一人、手足を広げた三角形頭の人物一人が上下に並び、更に左側には馬の頭部と人物が左右に並び、その左側には全身が描かれた馬一頭、人物一人がある。この人物の左側には左右に大きく蛇行する線が下

垂し、下段に描かれた直線に接している。蛇行線の左側には不明瞭だが動物とみられる図柄があり壁画は完了する。特に白鹿は他の装飾横穴墓では見られない図柄であるとともに、奥壁中央に描かれていることや神聖視される動物であることから、この羽山横穴の壁画のなかでも特に重要な意味合いがあったのかもしれない。

羽山横穴の造営年代は、大刀・銅釧などが概ね六世紀後半頃、鉄製轡が七世紀初頭位置つけられることから、横穴自体は六世紀末に造営され、七世紀初頭に馬具などが追葬されたと理解されている。被葬者の姿はいまだに不明であるが、上太田前

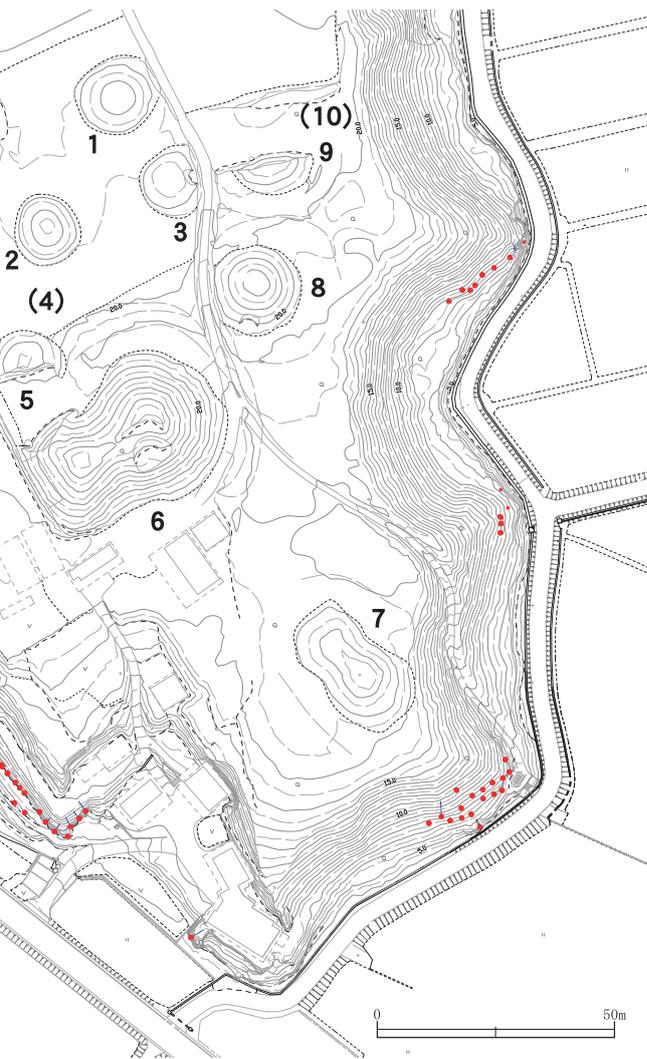
田古墳や与太郎内古墳の被葬者から続く伝統的氏族のひとり、古墳時代終末頃に太田川流域を支配した武人的な性格をもった有力豪族であったものと見られる。



羽山横穴奥壁



羽山横穴奥壁図文



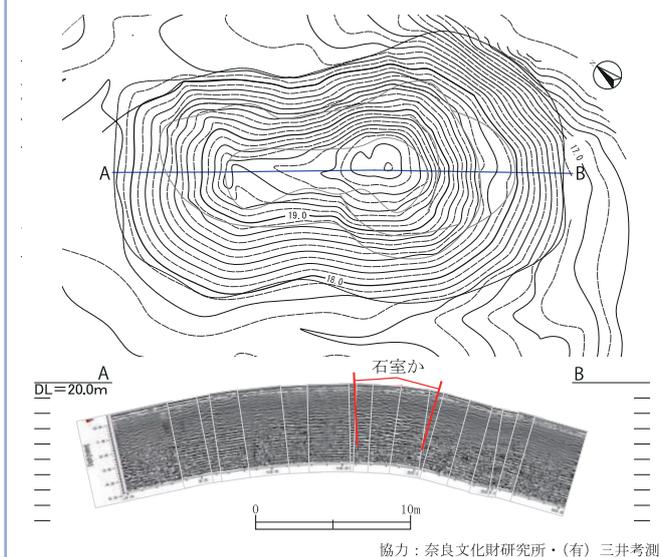
第6号墳（手前が後円部、奥が前方部）



第1号墳（左）と第2号墳（右）



第6号墳出土遺物（下段の白色の部分がイモガイ）



第7号墳地下探査

第6号墳

見学ガイド

の横穴式石室とは別に、前方石棺が存在したとされています。県内で数例しかない石棺が笠谷にあります。

- * 笠谷古墳群は私有地内にあるため、見学を希望される場合には必ず許可を得てから見学してください。
- * 笠谷古墳群第6号墳から出土した遺物は、ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの標本陳列室に展示しております。

ひたちなか市の古墳

4 笠谷古墳群

笠谷古墳群は、ひたちなか海浜鉄道 中根駅の北側、標高 17～20mの舌状の台地縁辺部に位置しています。現在、前方後円墳2基と円墳6基を確認できますが、1952年頃に発掘調査された前方後円墳の第6号墳が「第18号墳」と表記されていることや、現在畑となっている場所に箱式石棺の存在が確認されていることから、なお多くの古墳が存在していたと考えられます。

調査は、1952年頃に第6号墳の発掘調査と、1974年に古墳の分布図作成と各古墳の測量調査、2013年に地形測量と古墳の分布図の再作成（右図）、第7号墳の地下探査が行われています。古墳の規模は別表のとおりです。円墳は直径10～25mの規模を有しています。時期や埋葬施設などについては不明ですが、第5号墳は第6号墳の周溝との関係から、第6号墳に先行する可能性があります。

前方後円墳の第6号墳は、全長約43m、後円部径30m、前方部幅25m、後円部高さ5.4m、前方部高さ5mを測ります。墳形は、後世の削平により一部変形しています。墳丘からは円筒埴輪や形象埴輪片が確認できることから、埴輪が樹立していたと考えられます。埋葬施設は後円部の盛土内に位置し、横穴式石室と思われますが、発掘調査の成果が未報告であるため詳細は不明です。埋葬施設内からは、たちばく 大刀や馬具、てつそく 鉄鍔などが出土しています。大刀は、つかがしら 金銅製の把頭などがあり、その形状からけいとう 圭頭大刀と呼ばれるものです。馬具は金銅製のうす 雲珠やつじかなく 辻金具、イモガイを伴うくつわ 轡や飾金具などがあります。馬具の形状からは、6世紀後半と7世紀前半の2セットがみられることから、当古墳では「追葬」が推定されます。イモガイが用いられた馬具は、県内では当古墳以外ににほんまつ 東海村二本松古墳、てんじんやま 銚田市天神山古墳群第4号墳、常総市七塚古墳群第1号墳の3例しかなく、時期もみな7世紀前葉とされます。

もう一つの前方後円墳の第7号墳は、埴輪を有せず、低い墳丘が特徴です。2013年の地下探査により、後円部に横穴式石室の存在が指摘されました。この調査結果は、当古墳を考える上で大きな成果と言えます。

2013年度の十五郎穴横穴墓群の確認調査では、当古墳群の位置する台地斜面部に、54基の横穴墓を確認しました。今後は、台地上の古墳と斜面部の横穴墓との関係が重要になってきます。

番号	墳形	規模	
1	円墳	直径約16m	高さ1.7m
2	円墳	直径約14m	高さ2.0m
3	円墳	直径15m	高さ1.5m
4	円墳？	直径約9m	高さ1.0m
5	円墳	直径約15m	高さ約2.0m
6	前方後円墳	全長約43m	後円部高さ5.4m、前方部高さ5.0m
7	前方後円墳	全長約28m	後円部高さ約2.0m
8	円墳	直径18m	高さ2.5m
9	円墳	直径24m	高さ1.3m
10	円墳？	直径20m以上か	—

4世紀

5世紀

6世紀

7世紀



遺跡遠景（手前が中丸川、矢印の先が第6号墳）

ミニ知識

第6号墳では、後円部付近から^{くりぬき} 刳形式の舟形す。もしそうであれば、^{くりぬき} 刳形式古墳群にあったことになり

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

東大橋原遺跡の調査 一九七七(昭和五二)年

春、茨城県教育庁社会教育課に所用があつて出かけた。そこで偶然に吉川安延氏に出会った。筆者が石岡一高に勤務していた時の教え子であった。そこで吉川氏が石岡市教育委員会で文化財保護を担当していることを知った。その場で夏の発掘調査の依頼を受けた。それが東大橋原遺跡であった。その年、石岡市の府中小学校に海老沢稔氏が赴任していたので調査員をお願いすることとして調査をすることにしたのである。現地を訪れると畑一面に夥しい縄文中期の土器片が認められた。現地の状況からフラスコ状土坑群であろうと推測できた。調査は一九七七〜一九七九年にかけて行つたが、予期した通りにフラスコ状土坑群と竪穴住居跡が現れた。その中で全面が焼け、さらに周りも強い火熱を受けて硬化した面を持つ住居跡が認められた。火災住居であろうと考えていたが遺構内から焼けた木炭層が確認された。熟慮の結果、住居跡転用の土器焼成遺構と結論付け、その年の日本考古学協会の三重大会で概要について報告した。

国分僧寺跡を掘る 石岡市で筆者の担当した調査は東大橋原遺跡をはじめとして常陸国分僧寺跡、大作台遺跡、鹿の子遺跡などへと続いていく。一九八三(昭和五八)年に実施した常陸国分僧寺の調査では、それまで金堂跡として疑問の余地のなかった礎石列の下に版築遺構がなく近代の遺物が出土した。調査の結果、金堂基壇は現

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第13回 石岡市の遺跡の調査

プロフィール

1938(昭和13)年茨城県水戸市生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒。
1962(昭和37)年より1998(平成10)年まで茨城県内公立高校勤務。2010(平成22)年瑞宝双光章を叙勲。現在、ひたちなか市文化財保護審議会会長・ひたちなか市史跡保存対策委員・茨城県考古学協会顧問等。主な著書『原始古代の茨城』『茨城県の装飾古墳』等

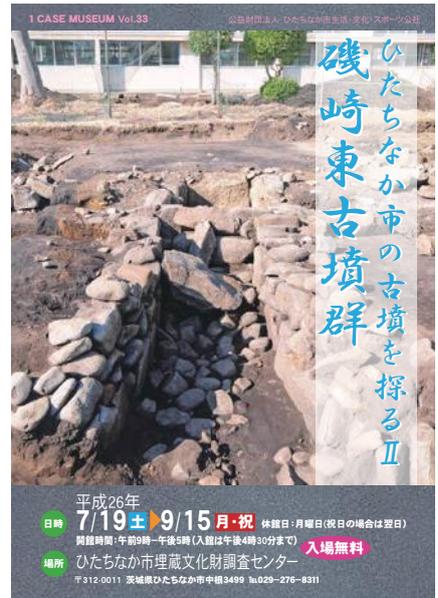


川崎 純徳

在の薬師堂建物の下にあることが判明し、薬師堂を移築する際に金堂の礎石を移動して庭園が作られたことが判明した。調査によって国分寺の範囲は東西約298m、南北220mの規模であることが推定されるに至ったのである。また各所に第二次世界大戦による防空壕跡などがある、戦時中に大きな損壊を受けたことが判明した。

大作台遺跡の調査 大作台遺跡は東大橋原遺跡と同じ時期の遺跡であり縄文中期の阿玉台式のフラスコ状ピット群、二段掘り込みの竪穴遺構等が検出された。ピット群や二段掘り込み遺構の性格等について筆者なりの見解を示したが未解決である。フラスコ状ピット群についてはなかば定説化している食料貯蔵穴説に対して粘土採掘坑説を主張している。

鹿の子遺跡の保存運動と調査 鹿の子遺跡は常磐道敷設にともなう事前調査として茨城県教育財団が調査を担当していた。茨城県史編纂のために現地視察を行い鍛冶遺構や特殊な連房式竪穴遺構、漆紙文書等が出土していることが判明した。当時の財団の調査は非公開であり、関係者以外は立入禁止であった。かくして同志たちとともに保存運動を行い、道路公団などとの交渉を行った。財団の調査終了後に高速道路周辺について石岡市教育委員会が独自の調査を行うこととなり黒沢彰哉氏、海老沢氏等と担当した。目的は遺跡の範囲確認であったが広大であり完全に把握できないままに調査は終了してしまった。



「ひたちなか市の古墳を探索」第二回目は、市内磯崎地区に所在する磯崎東古墳群を紹介しました。

古墳群の概要 当古墳群は、磯崎地内の酒列磯前神社境内から磯崎小学校周辺に位置しています。古墳の数は、一九五〇年の調査では五四基が確認されていますが、墳丘を持たないものもあり、さらに多くの古墳の存在が推定されます。現在は、数基の古墳が神社の境内やホテルニュー白亜紀の敷地内に点在しています。古墳は直径一〇mから二〇mの円墳が主体で、第三号墳のみ全長四〇mの帆立貝形古墳です。

発掘調査は、ホテルや小学校建設に伴い、一九六七年から二〇一二年までに一〇回ほど実施されています。これらの調査では、箱式石棺や竪穴式石室、横穴式石室といった埋葬施設が確認され、須恵器や土師器、大刀、鹿角装刀子、鉄鏃、骨鏃、ガラス小玉などが出土しています。

調査 一九六七年度の調査は、第二二号墳と第二四号墳が対象とされます。この調査の正式な報告はなく、出土遺物の一部が報告されているだけでしたが、今回、ひたちなか市広報広聴課から調査時の貴重な写真を提供していただきました（左写真）。写真からは、横穴式石室や墳丘上に並んだ埴輪列を確認することが出来ます。第二二号墳は直径一四mの円墳で、横穴式石室を有し、時期は七世紀前葉と考えられます。第二四号墳は直径一七m前後の円墳と推定され、竪穴式石室を有し、時期は六世紀前葉と思われれます。当古墳からは骨鏃という貴重な遺物が出土しています。骨鏃は、鹿の中足骨や中手骨を素材として作られた鏃です。茨城県内でも出土は希で、当古墳群以外には日立市千福寺下横穴墓群第三四・四〇号墓や東海村白方古墳群第七号墳、かすみがうら市大塚古墳群第五号墳の三遺跡しかありません。これらの骨鏃は、鉄



第22号墳石室の調査風景



第24号墳埴輪列の調査風景



第33号墳



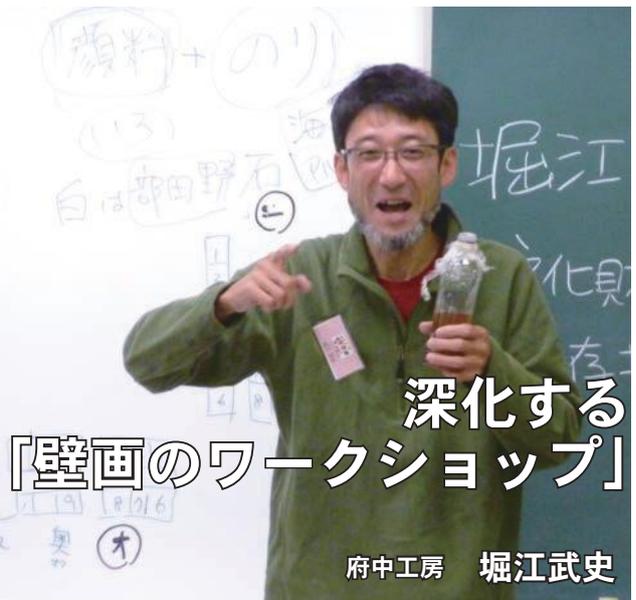
神奈川県横須賀市長沢1号墳
(報告書より転載)



骨鏃

鏃の長頸鏃を模倣した形態で、六世紀から七世紀にかけて、神奈川県から宮城県にかけての太平洋岸に主に分布します。このことから、海との関連が考えられる遺物と思われれます。
一九八九年度の調査は、第三〇号墳と第三三三号墳が対象となりました。帆立貝形古墳の第三三三号墳の調査では、くびれ部に埋葬施設があり、その中からは幼児骨が確認されています。当古墳は海を臨み、墳丘には石が葺かれています。同じような古墳として、神奈川県横須賀市の長沢一号墳が挙げられます。二つの古墳とも海を介した関連がうかがわれます。

(稲田健一)



みなさんは毎年一二月の虎塚石室の公開日に、壁画をみた子どもたちが小さな「模写」をしているのをご存じだろうか。今年で九回目となる「壁画のワークショップ」である。

壁画を参加人数に合わせて分割し、くじ引きで絵を割りあてる。一人ひとりが違う絵を描くのだ。テーブルは事前に石室の壁のように配置してある。任された絵の場所へ着席するから、お隣さんの描く絵が実際の壁画と同じように隣り合う。なぜここにこの絵があるのか、それを考えてもらうためである。もちろん、答えなどはない。

10cm角の凝灰岩ぎようかいがんに似たブロックを白い下地で整えた上に赤い絵を描くのだが、画材は何か。

顔料がんりょうと膠着剤こうちやくざいを混ぜたものを下地材、絵の具と考へ、まずはそれを自分たちで作ることから始める。

白い下地材はどうするか。当初は筆者が用意した白土はくどに卵や膠にかわを加えて作った。現在は虎塚に近いところで採取した風化凝灰岩を砕いてカジメの水溶液とまぜている。なぜカジメなのか。虎塚壁画の材料分析の結果、卵、膠は見当たらず、海藻由来の成分の存在が発表されたからである（文化財保存修復学会二〇一二年）。海藻だからフノリでもよい。固着力こちやくりよくはフノリのほうがやや強い。

赤色顔料は最初、工業ベンガラを使ったが、その後は県内で再発見されたベンガラや、近くで採れる鉄バクテリアを焼いて使っている。これにカジメ溶液を混ぜて使う。この絵の具で描いたものは、実物よりも赤色の彩度が低いように感じる。壁画の赤色を再現する楽しみがまだ残っているということだ。

次はブロックの一面を白く塗った上に、壁画の図面を見ながら赤色で絵を描く。描いた絵については各々の解釈を発言してもらう。具象文ぐしやうぶん、幾何学文きげがくぶんという言い回しや、研究者の見解を後にするのは、そこに筆者自身が納得しておらず、むしろ子どもたちの発想に期待しているからである。

最後に、壁画ブロックを持ち寄ってみんなで組み上げる。小さな虎塚石室の出来上がりである。

る。

子どもたちはこのワークショップを楽しんでいる。だがそこでは追体験を通じて考へ、発言し、共同作業が伴う。世に幅を利かす自己完結的な「ワークショップ」との違いはそこだ。一方、材料を現地で求める動きや、学会の研究成果がワークショップを変化させている。これは埋文センターの稲田健一さん、「ふるさと考古学」トータルコーディネーターのさかいひろこさん、矢野徳也さんの協力によるところが大きい。故郷の歴史を自分たちで考えるひとときをワークショップという形で提供した筆者にとつて、まことに喜ばしい深化である。そして、深化こそワークショップの本質であり、子どもたちとともに、「壁画のワークショップ」がさらに掘り進められることを期待してやまない。



組み上がった壁画 (2013.11.02)

武田西塙遺跡の製塩土器

佐々木 義則

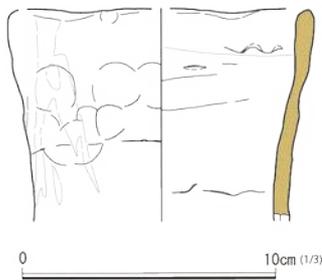


外面

内面

製塩土器内外面の様子

ひたちなか市武田西塙遺跡から出土した筒形の土器は、常陸国で最も新しい10世紀の製塩土器です。生産された塩の一部は、こうした製塩土器に入れられて運ばれ、日常の個別消費に用いられたと考えられます。武田西塙遺跡の製塩土器は、日立市北部付近か、福島県いわき市夏井川河口付近からもたらされたと推定されます。



残存：上半部40%、口縁部10%

法量：推定口径11.4cm

色調：外面明褐色・褐色、内面褐色・口縁部灰褐色

胎土：礫（透明少量、赤色少量）、骨針、黒雲母少量

技法等：外面指頭圧痕残る。内面横方向のナデ。内外面に粘土紐接合痕残る。外面に明褐色に変色する吹きこぼれ状の痕跡が認められる。

図1 武田西塙遺跡第227号住居跡出土製塩土器
(報告書の図を加筆・訂正し、再トレース)

1 ひたちなか市出土の古代製塩土器

ひたちなか市武田西塙遺跡の第二二七号竪穴住居跡からは、竈脇の壁際あたりから製塩土器破片が出土した(図1)。時期はともに出土した土器からみて一〇世紀前半に位置づけられる。以下、常陸国の製塩土器の生産と流通の様相をうかがいながら、その出土の意味を考えてみたい。

2 常陸国の製塩土器

土器で塩をつくる 古代の土器製塩は、まず海水を濃縮して鹹水をつくり、次に土器により鹹水を煮詰める煎熬によって粗塩をつくる。そして粗塩を土器に入れて焼き、堅塩をつくった。したがって製塩土器とは煎熬土器と堅塩土器を指す。

煎熬によって塩を結晶化すると土器はもろくなるため、土器は生産地で破棄される。したがって消費地から煎熬用の土器が出土する可能性は低い。

土器製塩の実験「森二〇〇九」等を参考にすると、煎熬でできたドロドロな状態の粗塩を、ある土器にまとめて焼き続けることで、土器容量いっぱい、の堅塩をつくったと推定される。おそらく消費地出土の製塩土器は、容器いっぱいの堅塩を入れた「堅塩土器」であったものと思われる。

なお、常陸国では製塩遺跡が未発見のため、煎熬に使われた土器は不明である。ただ、消費地出土の堅塩土器に注ぎ口をもつものがある点に注目すれば、堅塩土器と煎熬土器は兼用品であった可能性があると推定する。

大・小の製塩土器 常陸国内から出土する製塩土器は、口径一五〜二〇cmの「平鉢形」と、口径九〜一二cmの「筒形」の、大・小の製塩土器に分かれる(図2・3)。その容量は平鉢形が一・二〜二・三ℓ程度、筒形が〇・六〜一・〇ℓ程度であり、平鉢形・筒形の製塩土器では明らかに内容量に違いがある「瓦吹一九九八」。

常陸国において製塩土器は、八世紀から一〇世紀にみられる。八世紀は平鉢形が主体を占めるが、九世紀前半に筒形が出現すると大・小の製塩土器が併行して用いられる。そして一〇世紀には筒形が主体となっていく。つまり、九世紀に製塩土器は小型化するといえる。武田西塙遺跡から出土した一〇世紀の製塩土器もやはり小型品であった。

製塩土器小型化の意味

さて、八世紀の平鉢形は、九世紀以後に出現する筒形より大きいので、塩づくりにおいて筒形よ



1: 古屋敷 1 住 7 2: 鹿の子 C165 住 8 3: 金木場 70 住 6 4: 金木場 46 住 17 5: 金木場 41 住 16 6: 立下 1 次 1 住 2 7: 竹原城 1 住 17
 8: 天神後 2 住 7 9: 下相田 12 住 8 10: 下相田 12 住 7 11: 北の台 2 次 6 住 3 12: 北の台 3 次 1 住 9 13: 金木場 73 住 1 14: 金木場 73 住 2
 15: 金木場 60 住 2 16: 金木場 60 住 4 17: 金木場 60 住 3 18: 武田西端 227 住 5

図2 常陸国における製塩土器の消長

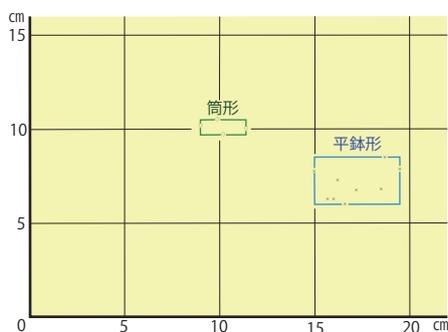


図3 常陸国の製塩土器の法量分布

は宮田川と東連津川に挟まれた地域であることがわかる。そこは古代常陸国多珂郡南端部の道口郷にあたる。製塩土器出土遺跡が海

中し、それは宮田川と東連津川に挟まれた地域であることがわかる。そこは古代常陸国多珂郡南端部の道口郷にあたる。製塩土器出土遺跡が海

3 常陸国の製塩遺跡

日立市北部の塩づくり 常陸国の製塩土器出土遺跡の分布は、日立市北部の太平洋沿岸地域に集中したのかもしれない。

9世紀前半になると、小型化した筒形が出現する。筒形は容量が小さく、平鉢形より燃料は少なくてすむと考えられる。常陸国ではその頃に、小規模な土器生産である土師器生産が開始される。これと同様の動きが土器製塩においても生じたものであろう。平安時代に入って成長を遂げた地域の有力者が、塩づくりによる利潤獲得に乗り出してきたのかもしれない。

9世紀前半になると、多珂郡の郡領層かと思われる。奈良時代の須恵器生産と共通するといえる。目的とする生産量を確保するために、人員や物資を用意できたのだろう。奈良時代にそうした生産体制を組織できた者は、多珂郡の郡領層かと思われる。

浜地域に集中することから、製塩遺跡は近くの海辺に存在するのであろう。

日立市金木場遺跡や北の台遺跡、下相田遺跡など、海に臨む台地上に位置する集落跡の脇には、海から入り込む小さな谷があり、そこにある程度の広さを持つ低地が認められる。そうした海辺の低地が製塩遺跡となる可能性は非常に高い。ではなぜ多珂郡南端部で古代土器製塩が行われることになったのだろうか。

製塩遺跡の立地条件 製塩遺跡は、燃料となる木材や、製塩土器の素材となる粘土の確保が重要であり、また、原料となる鹹水を容易に入手できる海浜部に立地する必要もあった。

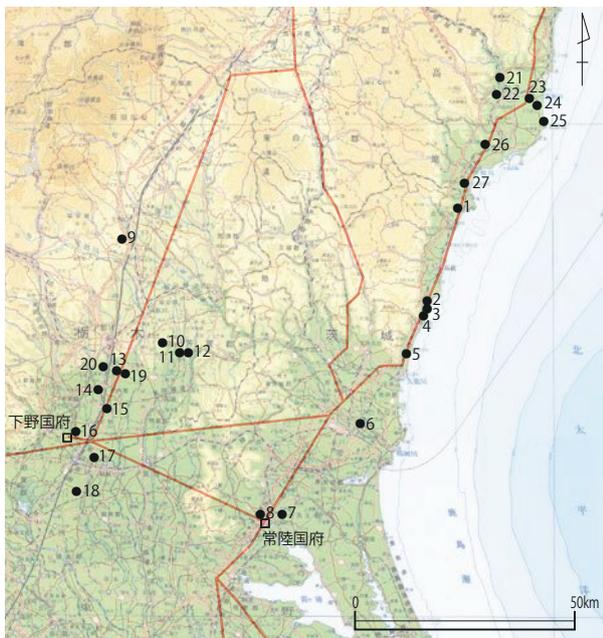
常陸国では、山が海に迫る地域は北部海浜地域である。西に連なる阿武隈山地を形成する岩石は南北で大きく異なっており、日立市宮田川付近から南側は堆積岩類、北側は花崗岩類となる。花崗岩地域では土器生産に適した粘土が形成されると思われるため、宮田川以北の地域が製塩土器製作に用いる粘土の確保には適した地域といえよう。そのことは、当地域に所在する明神越遺跡において、時期は不明であるが大規模な粘土採掘坑が二基調査されていることからもうかがえる。また山並みが最も海側に近づくことも、燃料となる木材の確保にとって有利であったのだろう。

さらに加えて、生産された塩の流通路の存在にも注目したい。片平雅俊の研究「片平二〇一三・二〇一四」により、古代多珂郡南端地域

では、駅路が海浜部近くを通る可能性が示された。生産した塩を運び出すための陸路は、製塩遺跡の立地条件として重要といえる。九世紀前半の金木場遺跡からは、牛馬用と考えられる「子」型の焼印や、「午家」墨書土器が出土した。焼印について猪狩俊哉は、地方の有力者の私的な牧で用いられた可能性を指摘する「猪狩二〇一四」。牛馬の飼育に塩を必要とすることも、塩生産地付近に牧が設置された理由であろう。塩の運搬に際して、牧で飼育する牛馬を利用した可能性も考えたい。

4 製塩土器の流通

製塩土器の分布 常陸国の製塩土器は、日立市北部に七遺跡が集中し（図4の2・3・4）、そのほかでは常陸国北端部に二遺跡、那珂川下流域に一遺跡、常陸国府周辺に二遺跡を認めるにすぎない。今後出土遺物の再検討が進めば遺跡数は増加することが予想されるが、それでも日立市域からの出土量の多さは変わらないであろう。なお津野仁は、内陸部の下野国で多くの製塩土器を確認した「津野二〇〇六」が、これは常陸国の塩の流通を考えるうえでも重要である。下野国の製塩土器は、常陸国の製塩土器と共通する平鉢形や筒形が多く、しかも胎土中に骨針を含む点も共通する。これは津野が指摘するとおり、



遺跡名
1: 叶南前B, 古屋敷 2: 横内 3: 豊後原, 下相田, 立下, 北の台, 金木場 4: 鶴子 5: 天神後
6: 武田西端 7: 竹原城 8: 鹿の子C 9: 山苗代A 10: 免の内台 11: グシ内南
12: 彦七新田, 寺平 13: 砂田 14: 一本松 15: 多功南原 16: 新開, 中井2号, 下野国分尼寺
17: 八幡根東 18: 金山 19: 西刑部西原 20: 宮の内B 21: 大谷 22: 石坂
23: 小茶門, 荒田目, 砂畑 24: 夏井麻寺 25: 薄磯 26: 岸 27: 上ノ内

図4 製塩土器の分布

(国土地理院平成19年発行400万分の1図使用, 赤線は古代の主要道)

下野国の製塩土器の多くが、常陸国から運ばれたからであろう「津野二〇〇六・二〇〇八」。また下野国では、免の内台遺跡や多功南原遺跡といった拠点集落で多数出土する点も、製塩土器の流通を考えるうえで注目できる。他の物品同様、購入にはそれなりの財力を必要としたことを示すものといえよう。

なぜ土器に入れて塩を運ぶのか 常陸国・下野国における製塩土器の出土数は、当時利用されたと考えられる塩の全体量としてはあまりにも少なく、生産された塩のごく一部にすぎないとみるのが妥当である。塩のみを籠などに入れて流通させたほうが、大量運搬には有利であったともいわれ

る「馬場二〇一三、羽鳥二〇一三」。

ではなぜ、重いにもかかわらず、土器入りの堅塩が流通したのであるのか。それはおそらく土器入りということに、交易者と消費者の双方に利点があったからと思われる。交易者側の利点としては、梱包の手間を省いた商品ということである。「大久保二〇一三」。いっぽう消費者側の利点は、塩が空気中の水分を吸収して湿気を帯びてしまう「潮解」に対し、土器の吸湿性により利便性が生じることである。「神野二〇一三」。長期保存がきいて再梱包の必要もない土器入り塩は、「日常の個別的な消費用の塩」「大久保二〇一三」として、交易者と消費者の双方にとって都合のよい商品であったのである。一般的には籠などに入れられた堅塩が大量に流通していたと考えられるが、土器入り塩はこうした利用とは異なり、市場で常備用の塩を少量だけ売買する際などには、とても扱いやすい存在であったと思われる。そうした理由から、重いにもかかわらず、下野国のような比較的遠方にも流通するものが現れたのだと想定したい。

5 武田西埜遺跡の塩の生産地

それでは武田西埜遺跡の堅塩土器の故地を考えてみよう。まずは常陸国の塩づくりの中心地である日立市北部の可能性が考えられる。ただし土器の形状を詳細にみると、小型筒形ではあるが、やや厚手で口が開き気味であり、現在知られている日立市北部の製塩土器とは形状がやや異なる点が気になる(図2)。そこで周辺の地域で類似資料を

探すと、福島県いわき市の夏井川河口付近に分布する製塩土器が目にとまる。胎土中に黒雲母を含む点も共通している。下野国の資料中にも、夏井川河口付近から運ばれてきた可能性のある製塩土器(彦七新田遺跡二区六住六)があるので、武田西埜遺跡の製塩土器が夏井川河口付近産になることも検討の余地はある。現在のところ判断がつかねているが、もし今後の検討により一〇世紀前半の夏井川河口付近産と推定されれば、そのころ常陸国では土器製塩が終わりを迎えていたため、土器製塩が行われていた陸奥国磐城郡から土器入り堅塩がもたらされた、ということになるであろう。ところで九世紀中頃の常陸国では、大洗地域での塩づくりが文献(『日本文徳天皇実録』)で知られる。このころから近世へと続く塩づくりが鹿島灘で始まるのかもしれない。それは土器製塩ではなく、塩釜(鉄釜・土釜)による塩づくりであった可能性があり、こうした動きが土器製塩に終わりを告げたと思われる。

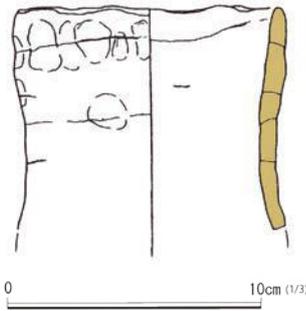


図5 いわき市夏井廃寺跡
8号土坑出土製塩土器
(千田 2014 より)

本稿作成にあたり、津野仁氏、川又清明氏、片平雅俊氏、塚本師也氏、亀田幸久氏、猪狩俊哉氏、鈴木素行氏、稲田健一氏、とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、日立市郷土博物館より、多くのご指導・ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- 瓦吹堅一九九八「常陸の古代製塩土器覚書」『史峰』二四、津野仁二〇〇六「栃木県出土の古代製塩土器について」『栃木生涯学習文化財団埋蔵文化財センター研究紀要』第一四号、津野仁二〇〇八「栃木県と周辺の古代製塩土器」『山梨県考古学協会二〇〇七年度研究集会』、川又清明二〇一四「茨城県における古代の製塩土器集成」『茨城県立歴史館報第四一四号、森泰通二〇〇九「コラム①古代の塩を作った」『塩の歴史と民俗』豊田市教育委員会、吉川明宏一九九〇「一般国道六号(日立バイパス)改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団、片平雅俊二〇一三「駅路が存在二〇一四」『統・駅路が存在』『茨城県考古学協会誌』第二五・二六号、猪狩俊哉二〇一四「資料紹介 金木場遺跡「子」型の焼印」『市民と博物館』一一〇、日立市郷土博物館、馬場基二〇一三「文献資料からみた古代の塩」、羽鳥幸二〇一三「瀬戸内の製塩と流通について」、神野恵二〇一三「都城の製塩土器」『塩の生産・流通と官衙・集落』、大久保徹也による討論の発言(『塩の生産・流通と官衙・集落』、千田一志二〇一四「製塩関連遺構と筒形土器」『震災復興土地地区画整理事業地内試掘調査報告二(薄磯地区)』いわき市教育文化事業団)

文 埋 センターの 日 々 2014 前期

4月

3-6 虎塚古墳 一般公開 / 4 大安場史跡公園ボランティア研修見学 / ひたちなか市新人研修 / 13 水戸市内原小学校へ資料貸出 [井上資料縄文土器ほか] / 15-17 十五郎穴横穴墓群試掘調査 / 15-24 三反田下高井遺跡試掘調査 / 16-24 堀口遺跡試掘調査 / 17 大橋泰夫氏 島根大学資料調査 [原の寺遺跡出土瓦] ↓



20 水戸市内原小学校より資料返却 / 杉山貴子氏 (筑波大学学生) 資料見学 [武田遺跡群 鑑砲射撃関連資料] ↓



5月

津田小学校 6年生社会科見学 ↓



8 近藤裕子氏より資料寄贈 [遠原遺跡縄文土器片ほか] / 8-13 小砂遺跡 / 8-14 津田若宮遺跡 / 8-16 枯松戸遺跡試掘調査 / 10 藤岡土器はにわ友の会見学 / 11 第11回企画展「常陸国の須恵器生産」終了 / ワンケースミュージアム31「絵になる埴輪」終了 / 東北芸術工科大学長 井ゼミ研修 / 14 那珂市菅谷西小学校 6年生社会科見学 ↓



14 大子町立上小川小学校 5・6年生見学 / 多元的古代研究会見学 / 16 遺跡めぐり / 17 ワンケースミュージアム32「遠原貝塚の貝塚」開始 / 20-23 西並木下遺跡試掘調査 ↓

査 / 23 中根小学校 3年生社会科見学 / 28 龍ヶ崎陶芸クラブ見学

29 中根小学校 6年生社会科見学 ↓



30 高齢者はつらつ百人委員会見学 / 市観光振興課観光ボランティア研修会見学

6月

5 佐野小学校 6年生社会科見学 / 10 那珂湊第三小学校 6年生社会科見学 / 10-13 市毛上坪遺跡試掘調査 / 10-17 赤坂遺跡試掘調査 / 12 枝川小学校出前授業 [歴史講座] / 12 外野小学校 3年生社会科見学 ↓



12 田名向原遺跡案内普及事業委員会見学 / 18 大和田恵子氏より資料寄贈 [君ヶ台遺跡採集土偶ほか市内外採集遺物] / 20 早川麗司氏資料調査 [武田遺跡群土器ほか] / 22 茨城町赤坂区

虎塚古墳 花便り



13 トリカブト

震災のあった二〇一一年秋、虎塚古墳の山林で珍しい花に出会いました。それが今回ご紹介するトリカブト(烏兜)です。この花は、キンポウゲ科トリカブト属の植物で、高さは九〇cmほどになる多年草です。花は青紫色のかなり変わった構造で、枝先に房状につきます。名前は、この花の形が、昔の装束の被り物「烏帽子」に似ているからとか、雅楽の舞に用いる鳳凰の頭をかたどった冠に似ているから、その名がつけられたとされています。葉は三〜五つに裂け、ギザギザしています。

この植物は皆さんもご存じのとおり猛毒で有名な植物なので、見つけた場所は秘密にしておきましょう。しかし、上手に加工することによって、薬としても使われるんですよ。(稲田健一)



2011.11.1

生涯学習移動教室／25 勝倉若宮
遺跡試掘調査開始／25 鉾田市旭
東小学校6年生社会科学見学

7月

一高野小学校6年生社会科学見学／
一三津田若宮遺跡試掘調査／2 橋
本勝雄氏(千葉県教育振興財団)資料調査
〔差波遺跡ほか植先形尖頭器〕／6 ワンケー
スミュージアム32終了／10 田彦
小学校3年生社会科学見学／二平
磯小学校6年生社会科学見学／勝倉
若宮遺跡試掘調査終了



12 博物館実習施設見学(茨城キリスト
教大学)／19 ワンケースミュージア
ム33「ひたちなか市の古墳を探る
II磯崎東古墳群」開始／20 ふるさと
考古学①「楽しい考古学」講師・
さかいひろ二氏)／21 ふるさと考
古学②「ちよつと昔を体験」講師・
さかいひろ二氏)
21 祝・入館者数一五万人達成
27 ふるさと考古学③「下キ下キ土
器との出会い」講師・さかいひろ

二氏)
8月
3 ふるさと考古学④「ヒトと石と
の関係」講師・柴田徹氏)／6 ひ
たちなか市若手教員初任者研修／
7 ひたちなか市図書館団体見学／
10 ふるさと考古学⑤「貝塚の考古
学1」(中村哲也氏)／19-22 佐野
中学校2年生職場体験／市毛下坪
遺跡試掘調査／20 夏休みの宿題



26 国府田良樹氏(茨城県立自然博物館)
資料調査(後野遺跡細石刃ほか)／26-31
博物館実習(茨城大学・筑波大学)



30 ふるさと考古学⑥「貝塚の考古
学2」講師・黒住耐二氏)／31 ふ
るさと考古学⑦「貝塚の考古学2」
(講師・小宮孝氏)
9月

5 みどり市岩宿博物館第58回企画
展「石器が語る時代の変化」へ資料
貸出(後野A遺跡無文土器ほか)／9 滋賀
県立安土城考古博物館平成26年度
秋季特別展「造形衝動の二万年」へ
資料貸出(三反田蛭塚貝塚ハート形土器)／
11 水彩サークル遊画資料写真／
13 骨格標本用タヌキ採取(市内長者ヶ
谷津)／14 ふるさと考古学⑧「土器
の考古学1」(講師・綿引逸雄氏)



15 ワンケースミュージアム33終
了／21 骨格標本用タヌキ採取(市
内中根君ヶ台)／25 水彩サークル遊画
資料写真／27 ワンケースミュー
ジウム34「日立からきた砥石」開始

入館者状況(2014.4.1.～2014.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計 (人)
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	660	3 (0)	90	(0)	750
5月	27	298	14 (4)	515	(249)	813
6月	25	244	7 (4)	479	(414)	723
7月	27	182	8 (2)	417	(276)	599
8月	27	271	14 (4)	212	(21)	483
9月	25	208	4 (0)	57	(0)	265
合計	157	1863	50(12)	1770	(960)	3633

()内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び
(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が
開催する事業は「ひたちなか市報」及び下記の
ホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の
笑う埴輪

秋号表紙の定番「女子大生と装身具」シリー
ズは、その座を「入館者一五万人」に譲ること
になった。遠原貝塚の小玉(7頁)と大きさを
比較するために、イモガイ、マガキガイの貝殻
で製作された三反田蛭塚貝塚出土の環状垂飾を
用いて、「女子大生と装身具」は既に撮影を完
了していた。秋号は女性、春号は男性という表
紙写真の順番も崩すことになる決め手は、
「二四九九九人目の入館者(8頁)であった。
一五万人目の入館者を迎える日は、カウン
ダウンを聞きながら待機していると、あと二人
というところに、親子連れが入館してきた。厳
密な前後ではなく、このような場合、親が子
に「入館者一五万人」を譲るのが事の成り行き
というものだ。話を聞いてみれば、当日に開催
していた「ふるさと考古学」を兄が受講してい
て、迎えに来た父に付きそい埴輪が好きで観て
いたという。記念品には馬形埴輪の置物を入れ
てあったから、贈り手まで嬉しくさせる廻り合
わせとなった。

後日に、「二四九九
九人目の入館者」
の写真も掲載した
いと、撮影の状況
設定を説明して依
頼したところ、あつ
さり承諾をいた
だいた。さすがに
無精ひげを伸ばし
てくれとまでは言
えなかった。



(磯崎健作さんと子どもたち 2014.8.31)



ひたちなか埋文だより 第41号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2014年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷